

## 第9回(2009. 2. 11 配信)

## 雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「2月はバレンタイン・デー」

2月14日は「バレンタイン・デー」といって、世界中で女性が男性にチョコレートを贈る日だと思っている人が多いが、これは日本のチョコレート屋が企てた陰謀で、全くでたらめである。

3世紀、ローマ皇帝クラウディウス2世(268~270)は、兵士たちが家族のことを思って戦場に出たがらないのだと知って、それなら家族がいなければいいのだと考え、結婚を禁止した。イタリア中部の都市インテラムラのキリスト教司祭バレンチノは、このかわいそうな若者たちを、見るに見かねてそっと結婚させてやったが、それを知ったローマ皇帝によって西暦270年2月14日に処刑されてしまった。

他方、ローマには豊穡の神ルベルクスを祀る行事があった。このとき、若い女性たちの名前を書いた紙が籠に入れられて、男性たちがその紙を引いて、当たった娘と祭の間つき合うという習慣があったが、あまりにも風紀が乱れてきたので、西暦496年時のローマ教皇は、女性の名前ではなく聖人の名前を書いた紙を引かせることにした。この祭と、聖バレンチノ(英語読みでバレンタイン)と一緒に、バレンタイン・デーになったといわれている。そして、恋人、友だちや家族などに贈り物をし、愛のカードを送るようになった。欧米では現在も続いている行事である。チョコレートとはまったく関係のない話である。ところが、日本人は何を血迷ったか、この日に女性から男性にチョコレートを贈るようになった。したがって、世の若者たちは、商魂たくましいチョコレート屋(ケーキ屋)に踊らされているわけである。もっとも、原料のカカオ豆は健康に良いといって、最近は見直されてきたが、バレンタイン・デーに贈るような甘いだけでカカオの含有量が少ないものでは、かえって健康に良くない。ただ甘ければいいというものではない。そもそも世の中は決して甘くはないのだ。

チョコレートの原料であるカカオ豆は、中南米が原産のカカオの木の実である。この実は古くから栽培食物としてマヤ文明の人々に食されていたようだが、1502年にコロンブスがコスタリカから持ち帰って、スペイン国王に献上したのが西欧に紹介された最初である。この樹木は北緯20度から南緯20度の暖かい気候の場所に生育する灌木で、この実は楕円形や三角形など様々だが、一般的には長さおよそ25cm前後、直径10cm前後の楕円形をしている。この実のなかに数十粒のカカオ豆がある。このカカオ豆をすり潰してミルク、砂糖などを加えるとチョコレートになる。ホワイト・チョコレートはカカオ豆の脂肪分を主成分とし、そのほかの成分を少なくしたもので、カカオの苦さも少なく色も薄い。したがってミルクの色の方が強いから白くなる。このすり潰したカカオ豆から脂肪分だけを取り除いて粉碎し、砂糖、粉ミルクを混ぜたものがココアの原料になる。

カカオの実は、コロンブスが持ち帰っても、あまり西欧では食されなかったが、17世紀に英国人によってココア飲料が開発され流行した。そこで、イギリスは当時「黄金海岸」と呼ばれていたガーナに広大なココア農園を建設した。チョコレートとして流行したのは19世紀になってからである。なお、ココアとホット・チョコレート(飲むチョコレート)とは、一般的には厳密な区別はされていない。フランス語ではショコラ・ショー(温かいチョコレート)というが、いずれにしてもイギリス人によって最初に開発されたものである。現在ではカカオ豆の生産量1位はコート・ジボアール、2位はガーナで3位にアジアのインドネシアが入っているが、アフリカが全世界の三分の二を占めている。

雲竹斎は、ガーナを訪問した際に、国立公園内のカカオの実を採って食したが、不味くて食べられたものではなかった。これを現在のようにした英国人は偉いのか、たんに食い意地が張っていただけなのか知らないが、いずれにしても食い物への執念はおそろしい。国立公園のカカオの実を盗んではドロボーだという人がいるが、黙って取ったのではない。カカオの木に聞いたら「どうぞ」という声が聞こえた。本人同士の了解のうえのことである。ガーナ製のチョコレートには、同じ板状でもいろいろな種類があったのしい。なかには塩味のものまである。なにより非常に硬くて歯が折れそうなのがいい。スイスで買ったチョコレートは、猛暑のガーナで数日滞在して日本に帰国したら、スーツケースの中で溶けて、帰路の飛行機の中でまた固まったような痕跡があった。その点ガーナのチョコレートは溶けないからえらい。

日本では、昭和 11 年(1926)にモロゾフがバレンタイン・デーの広告を出したのがはじまりだといわれている。戦後の昭和 30 年ごろにデパートでも宣伝し始め、チョコレート屋のメリーが伊勢丹でキャンペーンを張ったというが、それほど流行しなかった。昭和 50 年(1975)ごろになると、「義理チョコ」という言葉が流行し始め、チョコレートの売れ行きが急速に伸びていった。そんなわけで、バレンタイン・デーは女性が男性にチョコレートを贈る日だと思っているのは日本人だけである。

最近では、ご丁寧にも 3 月 14 日は、男性が女性にチョコレートを返礼に贈る「ホワイト・デー」なるものを考え出した。ところが、欲が深い世の女性たちは、チョコレートではなく高級ブランド品を求める傾向が強くなり、それを欲しさに義理チョコを贈る、すなわちエビで鯛を釣る作戦が流行しはじめて、チョコレート屋の思惑が若干はずれつつあるとはいえ、その販売量は半端なものではない。この時期、デパートなどでは日常それほど必要としない特殊な商品を追い出して、チョコレート売り場を拡大する。非常に迷惑する人もいる。

ところで、人間関係は勘違いで成り立っているものだから、間違っただけで贈ってしまったたり、恋人がいなくて焦っていて、よく見定めずに贈ってしまったたりした人には、5 月 13 日の「メイストーム・デー」なる日があって、この日は別れ話を持ち出す絶好の日だ、とされている。しかし、この日が過ぎると、6 月 12 日にはめでたく「恋人の日」を迎えるのだそうである。また、半年後の 9 月 14 日は「メンズ・バレンタイン・デー」といって、男性側から愛を告白する日だ、などといって日本ボディファッション協会が下着を贈ろう、などとキャンペーンを張っている。柳の木の下でのジョウを狙おうとする便乗商戦だが、バカな日本人たちは、何だかんだと理屈を付けては、利口な業者の口車に乗って踊らされているのである。この日は、もっと気の利いた品物を贈るようにしたいものだ。しかし、雲竹斎先生にチョコレートでも贈ってやろうかと思う女性がいたら、せっかくのご厚意に、私は何も断る理由はない。